

関係辞 après の構文と叙法

曾 我 祐 典

I. は じ め に

フランス語で時間関係を表わす際に発話者がよく用いる関係辞 *relateur* (R) のなかで、名詞連辞 (*qc*) と節 (*que sub* または *que ind*) のいずれも従えうという統辞上の共通点を持つのは、*après*, *au fur et à mesure*, *avant*, *depuis*, *dès*, *jusqu'à*, *lors*, *pendant* である。このうちで、不定法表現 (*inf*) も問題なく従えうるのは *après* と *avant* であるが、前者は後者と異なって接続法節だけでなく直説法節も従えう。以上をまとめると次のようになる。

	<i>qc</i>	<i>inf</i>	<i>que sub</i>	<i>que ind</i>
<i>après</i>	+	+	+	+
<i>au fur et à mesure</i>	(de)+			+
<i>avant</i>	+	(de)+	+	
<i>depuis</i>	+			+
<i>dès</i>	+			+
<i>jusqu'à</i>	+	??	(ce)+	
<i>lors</i>	(de)+			+
<i>pendant</i>	+			+

これら時間関係辞のなかでもっとも多様な統辞的結合を示すのは *après* であるが、〈R-*inf*〉 〈R-*que sub*〉 〈R-*que ind*〉 のうちの1つを発話者がどのようにして選ぶかについては不明な点が多い。この関係辞の構文・叙法の選択実態を、他の関係辞の場合と比べながら明らかにするのが本稿の目的である。

après が表わす時間関係は、*depuis*, *dès* が表わす時間関係と似かよった点が

ある。それにもかかわらず, après にだけ 〈R-inf〉の構成が見られ, ときに節表現を圧倒しさえするようだ。以下では, まずこの点を検討しよう (II)。また, この関係辞が表わす時間関係は avant が表わす時間関係とある意味で対称的なものと言える。しかし, après のほうにだけ 〈R-que ind〉の構成が見られ, 〈R-inf〉〈R-que sub〉と微妙に競合するようだ。これについても考えてみよう (III)。このようにして, après を用いるときに発話者がたどる, 発話意図から表現手段への道筋を明らかにしていくことにしたい。

II. depuis, dès と après

フランス語で意思伝達をする際に発話者が叙法・構文を選択する仕組の概要はすでに曾我 (1985a, b, c, 1986) で示したが, 時間関係を含む事柄を表現するときにも, 発話者はそのような原則に従うものと考えられる。

たとえば, ある行為主体 actant (A) が相ついで2つの行為を行なうとしよう。このような出来事を伝えるにあたっても, 発話者がそれをどのように捉えているか, どのような構造の事柄として頭のなかで思い描いているか, それが関係辞を決定すると同時に, 次のように叙法・構文を左右すると考えられる。すなわち, 発話者の視像 vision が単一的であるか複合的であるかが不定法表現と節表現のあいだの選択に大きく影響し, 後者の場合, 行為の時間的位置づけの欲求が直説法の使用を促すであろう。

じっさい, 「同一主体によって相ついでなされる2つの行為」といっても, その捉えかたはさまざまである。次の1と2で少し具体的にそれを見よう。

1. 2つの行為を, 一方が他方の起点であるような時間関係において捉えることがある。発話者は, 先行行為を時間軸上のある点に思い描き, それを枠組として後行行為を考える。あるいは, 後行行為を思い描き, その時間的枠組として先行行為を考える。いずれにせよ, 発話者は伝えようとする事柄を分離した2つの要素から成るものと見る (複合的視像) だけでなく, 発話時点に対する

それぞれの時間的位置を明確に意識している。このような事柄を伝えるには、節表現に、それも時間的位置づけの能力を持つ直説法表現に訴えることが必要となる。こうして、〈A ind depuis que A ind〉〈A ind dès que A ind〉の構成によってのみ語ることになる。

- 1) Depuis que je *me suis installé* ici, je n'ai plus de visites.
- 2) Elle a complètement changé depuis qu'elle *a cessé* de boire.¹⁾
- 3) Dès que tu *auras rempli* ces papiers, tu recevras ton passeport.
- 4) Elle vous téléphonera dès qu'elle *sera arrivée* à l'aéroport.

この場合、発話者は2つの行為をそれぞれ自立したものとして思い描き、発話時点を基準とする時間軸上である関係において対置して捉えている。一般に、このような構造の事柄を表わすには直説法節を含む複文が適当で、不定法表現の単文では不十分であると発話者は感じるようだ。このことは、他の時間関係辞の場合にもたしかめられる。「XにつれてY」「XのときY」「XのあいだY」のような事柄を **au fur et à mesure de inf*, **lors de inf*, **pendant inf* のような不定法表現によって語ることはない²⁾。

2. それでは、2つの行為を前後関係において捉える場合はどうだろうか。このときは、少なくとも次の2通りが考えられる。

2.1 まず、2つの行為を一体と見なす場合がある。2つの行為を、自然に継起するもの、順調に連続するもの、断絶なくなめらかに推移するものと見て、ひとまとまりに捉えることがよくある。このような事柄を伝えようとするとき、発話者はしばしば〈A ind après inf〉という構成の表現を用いる。〈A ind après que A sub〉または〈A ind après que A ind〉の構成を選ぶことはない。

- 5) Je vous répondrai après *avoir consulté* mon avocat.
- 6) Il est parti après *avoir fait* son exposé.

ここに見られる発話意図と表現形式の対応関係は、「XのためにY」を前望の視像 *vision prospective* において単一構造の事柄と捉えて〈A ind pour inf〉

で表現する場合とまったく変わらない³⁾。

2.2 同一主体の2つの行為を、なんらかの意味で分離したものと見る場合もある。発話者は、頭のなかで2つの場面を思い描き、そのうえでそれらを前後関係において捉える。

2.2.1 このような複合構造の事柄を伝えようとするときは、しばしば〈A ind après que A sub〉の構成による。次のような文で、関係辞に導かれる部分はしばしば「必要な先行条件」(7)や「強調すべき先行状況」(8,9)を表わす。

7) Vous pourrez rentrer chez vous après que vous *ayez terminé* ce travail.

8) Il est distrait au volant de son auto et laisse souvent ses flèches de direction levées, même après qu'il *ait effectué* son tournant.

9) Après que nous *ayons écouté* le communiqué, nous avons fermé le poste.

規範文法は「*après que* の後では直説法」と説くことが多く、7)を示す DUBOIS, J. *et al.* (73), p. 190 にもこの旨の注記が見られるし、《La Peste》で当初8)であったのが La Pléiade 版などでは *après qu'il a effectué* に改められたことが GREVISSE, M. (80), p. 1339 に記されている。これについては III. 2.1 で論じることにする。

ここでは、複合構造の事柄と捉えるときでも、前置や休止・挿入語句などにより主動詞と切り離した不定法表現を用いて語ることがあるという事実を指摘しておこう。

10) Après *avoir visité* le musée, nous sommes allés au Quartier latin.

11) Nous partirons, aussitôt après *avoir dîné*.

このように、「同一主体」のときは、人称活用形を用いる煩わしさを避けて不定法表現ですませようとする傾向が見られる。発話者は、行為主体表示の欲求が非常に強く、いわば「臨界」に達してはじめて節表現に訴えることをいと

わなくなるものと考えられる。

2.2.2 発話者が2つの行為それぞれの時期を明確に意識するなら、接続法表現では不足となり、次のように直説法表現を用いるはずである。

12) Et après que mes yeux *auront été* beaux, ils se rempliront d'ombre comme tous les yeux. (Duras, Théâtre, Gallimard, p. 103)

13) Après qu'elle *s'est mariée*, elle est allée vivre à Perpignan.

14) ?Après que j'*aurai classé* tous ces dossiers, j'irai prendre une bière à la Gueuze.

15) ?Après que nous *aurons fait* ce voyage, nous aurons beaucoup appris,

しかし、12) を示した TOGEBY, K. (82) が「après que は常に未来・過去の複合時称を従える」(p. 306) と述べるだけであるのに対して、13) を示した RIETSCH, P. *et al.* (75) は、〈A ind après que A ind〉の構成の文について「くだけたフランス語」(p. 21) と記している。

また、14) 15) については、インフォーマント(30代の高学歴のフランス人)5人が、時間的位置づけという発話意図にもかかわらず、不定法表現または他の言いかたのほうが好ましいという判断を示した。これについては III. 2.2 で論じることにする。

3. これまで depuis, dès と比べながら après の使用実態を見てきたが、行為主体が1つの場合に話を限ってきた。2行為の主体が同一であれば、事柄の構造を単一的と捉えることも複合的と捉えることも考えられ、前者であれば不定法表現に限られるが、後者であれば不定法表現か節表現のいずれであるか(さらに接続法または直説法のいずれであるか)が問題となる。

これに対して、伝えようとする2行為の主体が異なっていれば(A₁, A₂)、発話者は複合的視像においてその出来事を捉え、行為主体を表示する接続法表現または直説法表現(複文)を用いるものと考えられる。じっさい、〈A₁ ind depuis que A₂ ind〉〈A₁ ind dès que A₂ ind〉の構成と並んで、après については〈A₁ ind après que A₂ sub〉〈A₁ ind après que A₂ ind〉の構成しか観

察されない。

17) Votre femme vous a téléphoné juste après que vous *soyez sorti*.

18) Après que vous *aurez parlé*, il parlera.

ここでも、〈R-que *sub*〉と〈R-que *ind*〉のあいだの競合関係が問題となろう。同一主体のときの〈R-que *ind*〉の可否の問題も残されている。次の III でこれらの点について考えてみよう。

III. avant と après

2つの行為を前後関係において捉える場合の関係辞として、II. 3 では après のみを扱ったが、じっさいには avant を用いることもあるのは言うまでもない。両者は、前後する行為のどちらを中心に出来事を見るかによって一方を選ぶという相補関係にあるわけだが、以下では、avant の用法を見たあと、それとの関連で après の構文と叙法を検討する。

1. 先行する行為のほうを中心に出来事を見る場合に使う関係辞 avant の用法は、après のそれと共通点も多い。2行為の主体が異なるときと同一のときに分けて見ていこう。

1.1 前後する2つの行為がそれぞれ独自の主体 (A_1, A_2) によるものであるときは、そのような出来事を発話者は複合的視像において捉え、行為主体を表示する接続法表現(複文)で語るものと考えられる。じっさい、〈 A_1 *ind* avant que A_2 *sub*〉の構成しか観察されない。

19) Je serai parti avant que tu *viennes*.

20) Avant que nous *ayons pu* l'en empêcher, il saisissait sur notre bureau un coupe-papier de cristal.

21) Marc m'a téléphoné tout à l'heure avant que vous ne *soyez arrivé*.

22) L'aurore paraît toujours avant que le soleil *soit levé*.

19)を示す *ARRIVE, M. et al.* (86) は、接続法使用を他の多くの文法家と同じように「可能性の世界の行為」ということで説明しようとしている (p. 638)。しかし、19) 20) はそのように見てよいとしても、21) 22) のように現になされた行為や自然現象の描写でも接続法を用いることがあるのだから、あまり説得力を持たない。

19)~22) のような表現をするとき、発話者に異なる行為主体を表示する意図があるのはたしかである。発話意図はそこまであって、主節〈A₁ ind〉とある時間関係を結んでいる従節〈avant que A₂ sub〉の時点を、あらためて他の手段(直説法の形態)で位置づけようとはまではしていないのである。「発話者に行方を(発話時点を基準点として)時間的に位置づける意図がないために直説法表現を使わない」という説明のしかたのほうが適切であろう。

1.2 前後する2つの行為が同一主体によるものであるときは、事柄をひとまとまりのものと捉えるか、2つに分離したものと捉えるかによって、採用する構文・叙法が異なる。

1.2.1 まず2つの行為を一体のものと見なす場合であるが、このようなとき、発話者は〈A ind avant de inf〉という構成の表現を用いる。

23) Je passerai à la pharmacie avant d'aller au travail.

ここに見られる発話意図と表現形式の対応関係は、*après* の場合にもまったく同じように認められたものである (supra II. 2.1)。

1.2.2 同一主体による2つの行為のあいだに、なんらかの意味で断絶を意識することもある。じっさい、時間的隔たりのある両者を、分離した2場面と捉えることは珍しくない。このようなとき、発話者は〈A ind avant que A sub〉の構成によって表現する気を起こしやすい。もちろん、このような複合構造の事柄であっても、前置や休止・挿入語句などによって主動詞と切り離した不定法表現を用いて語ることがあるのは、*après* の場合と変わらない。ここでも発話者は、行為主体表示の欲求が「臨界」に達してはじめて節表現に訴える

ことをいともなくなるものと考えられる。

24) ?Je travaillais chez Dulac avant que je ne *prenne* mes fonctions à Lille.

25) Avant que je ne *prenne* une décision, je veux encore réfléchir.

26 a) ?Avant que tu *aies pu* parler, tu es parti.

26 b) Avant qu'il *ait pu* parler, Pierre est parti.

関係辞語群を後置する24) については、不定法表現のみを可とするインフォーマントもいて、判断がわかれた。25) は、DUBOIS, J. *et al.* (73), p. 190に示されたもので、直前に「同一主語のとき、不定法変形は頻繁であるが義務的でない」との解説がある⁴⁾。規範文法は一般に主節と同一主語の接続法節を不可とするが、avant についてはこのように容認する文法家が少なくないということを書き添えておこう。

26 a) 26 b) は PINCHON, J. (86), p. 225 に示されたものだが、直前に「不定法変形は 3 人称主語よりも 1, 2 人称主語のときのほうが頻繁」との記述が見られるのは興味深い。節表現が 3 人称に多いとすれば、それは次の理由によるものと考えられる。すなわち、前後する 2 つの行為も、それをするのが自分や話相手であるなら、意識の連続性によって全体をひとまとまりの事柄と捉えやすい。これに対して、第三者の行為は内面的には捉えられず、外から眺めるほかない。2 つの行為を、分離した 2 場面と受けとる可能性がそれだけ高まり、接続法節によって表現する気を起こしやすくなる。

2. 前後する 2 行為を含む事柄を après を使って語る場合、行為主体が異なれば節表現、同一なら不定法表現または節表現によることを II. 3 で見た。前の場合については接続法節と直説法節のあいだの選択が、後の場合については直説法節の可否が問題であった。これを次に検討しよう。

2.1 周知のとおり、après については〈R-que ind〉とならんで〈R-que sub〉の構成をこの数十年来広く用いるようになってきている。多くの文法家がこのことを論じているが、BONNARD, H. (77) が有益な示唆を与えてくれる。彼

は、〈R-que *ind*〉と〈R-que *sub*〉の用例のあいだに有意の対立がまったく無いという事実認識に発して、「経済性」と「類推」の2原則によりこの現象を説明しようとする。

すなわち、直説法を用いるなら時称の照応のために主動詞の時称より1段階複雑な活用形（主動詞が現在形・半過去形・単純未来形などの単純形なら対応する複合形、複合過去形・大過去形・前未来形などの複合形なら対応する重複合形）を従節に登場させる必要が生じる。これに対して、接続法を用いることにするならば、同一主体のときに主動詞の人称・時称にかかわらず不定法複合形のみですませるように、主動詞の時称にかかわらず接続法複合形（接続法現在形＋過去分詞）のみですませることができる（経済性）。

また, *avant*, *pour*, *sans* など不定法表現を従えうる他の関係辞はすべて接続法節を従えうる。唯一の例外が *après* であったが⁵⁾、〈R-*inf*〉と〈R-que *sub*〉の組合せという一般傾向にならうのが自然である（類推）。

もちろん、彼のように接続法表現と直説法表現のあいだに有意の対立が無いと言いきるのはゆきすぎであって、じっさいには発話意図しだいで両者を対立するものとして使い分けるはずである。すなわち、発話者に発話時点を基準点とする位置づけの欲求が（経済性の原則を無視するほど）強ければ、〈R-que *ind*〉の構成を選ぶことをいとわないと考えられる。

2.2 それでは、14) 15) など同一主体の2つの行為を分離したものと見る場合に、時間的位置づけという発話意図にもかかわらず〈R-que *ind*〉の構成を避ける傾向を示すのは何故だろうか。 depuis, dès を常にこの構成で用いることを考えあわせると、インフォーマントが次のような言いかたのほうをより好ましいとするのは一見奇妙なことに思われる。

14') *Après avoir classé tous ces dossiers, j'irai prendre une bière à la Gueuze.*

15') *Après avoir fait ce voyage, nous aurons beaucoup appris.*

2行為のあいだの隔たりは前置や休止・挿入語句などの統辞的手段によって

表わせるとしても、時間的位置づけのほうはどのように考えればよいだろうか。

それは, après の場合の〈R-inf〉がになう時間的情報が豊かであるという事実によって説明できよう。じっさい, 14') 15') において2つの行為の前後関係を表わす手段は関係辞 après だけではない。「完了相, 主動詞の行為に対する先行性」を表わす不定法複合形がある。après の後に必ず複合形を続けることによって, 2つの行為の前後関係を確実に伝えうるのである。したがって, そのぶんだけ発話時点を基準点とする位置づけの欲求が弱くなると考えられる。そして, 直説法を用いると主動詞の時称に正しく対応する複合形・重複合形を使う必要が生じて面倒なことになるのは上に述べたとおりである。

なんらかの理由で発話時点を基準点とする位置づけの欲求が非常に強いときには, 〈A ind après que A ind〉の構成によって表現することは言うまでもない。また, 従節の行為の時間的位置づけというだけなら, 他の関係辞によってそれをすることもありうる。たとえば, 14) 15) と発話意図が完全に同じとは言えないが, Quand j'aurai classé ... や Lorsque nous aurons fait ... のような言いかたもよく見られる。

IV. お わ り に

他の時間関係辞(とくに depuis, dès および avant)の場合と比べながら, après を使うときに発話者が〈R-inf〉〈R-que sub〉〈R-que ind〉という3構成のあいだの選択をどのようにして行なうのかを見てきた。

伝えようとする事柄が2つの行為を含んでいる場合, 発話者は行為主体が2つであれば〈R-que sub〉または〈R-que ind〉を選ぶが, 発話時点を基準点とする位置づけの欲求が強くないかぎり前者によって表現するという傾向が認められる。

行為主体が1つのとき, 2つの行為を一体と捉えるなら, 発話者は〈R-inf〉を選ぶ。これに対して, 2つの行為を分離したものと意識する場合は, 行為主

体表示の欲求が強ければ〈R-que sub〉を選ぶが、そうでなければ前置や休止・挿入語句などにより主動詞と切り離れた〈R-inf〉でまにあわせる。さらに、発話時点を基準点とする位置づけの欲求が強ければ〈R-que ind〉を選ぶが、そうでなければ前置や休止・挿入語句などにより主動詞と切り離れた〈R-inf〉でまにあわせる。このように、〈R-inf〉を多用する傾向が見られるのは、前後関係というものが分かりやすい明瞭な関係であることを加えて、「先行性」を不定法複合形によっても表わせるという事情によると考えられる。

本稿で扱ったのは、もちろんフランス語の時間関係辞に関わる事象の一部にすぎない。残されたさまざまな問題の検討は、別の機会に譲ることにしたい。

注

- 1) 主節と従節の3人称主語は同一人物を指す。以下同様。
- 2) 時間関係を含む事柄「XまでY」も、節表現で語るのがふつうで不定法表現にはよらない。「XほどにY」のように程度を問題としつつ全体をひとまとまりの事柄と捉えるときは、jusqu'à inf を用いる。曾我 (86), pp. 90-91 参照。
- 3) 曾我 (86), pp. 86-89 参照。
- 4) 不定法変形という考えかたには問題があるが、ここでは論じない。
- 5) じっさいには、au lieu (de inf/que ind), au point (de inf/que ind), sous prétexte (de inf/que ind) などもある。

引用文献

- ARRIVE, M. et al. (1986): *La grammaire d'aujourd'hui*, Flammarion.
- BONNARD, H. (1977): "Le mode après «après»", *Le Français moderne*, 4, pp. 300-304.
- DUBOIS, J. et al. (1973): *La nouvelle grammaire du français*, Larousse.
- GREVISSE, M. (1980): *Le Bon Usage*, Duculot.
- PINCHON, J. (1986): *Morphosyntaxe du français*, Hachette.
- RIETSCH, P. et al. (1975): 『現代フランス語法辞典』, 大修館.
- TOGEBY, K. (1982): *Grammaire française, II. Les formes personnelles du verbe*, Univ. de Copenhague.
- 曾我祐典 (1985a): 「フランス語の動詞叙法」, 『フランス語学の諸問題』, 三修社, pp. 63-73.
- (1985b): 「フランス語における動詞叙法の選択」, 『人文論究』 35-2, pp. 108-

123.

(1985c) : 「フランス語における語群の係りかたと動詞叙法」, 『年報・フランス研究』 19, pp. 87-100.

(1986) : 「フランス語における叙法・構文の選択について」, 『フランス語フランス文学研究』 49, pp. 84-94.

——文学部教授——